～文化的歴史的所産を巡る～

残したい情景

第42回 島根県出雲市

一般財団法人 日本不動産研究所

地域を守り続ける築地松

伝えるべき伝統の原風景

松江から出雲大社に向かうには、出雲市斐川町の出雲平野の真ん中をつっきる県道を使うことが多い。交通量の多い国道9号を避ける意味もあるが、広くのどかな田園風景が気に入っているからだ。出雲平野は、東を宍道湖・西を日本海の大社湾に面する山陰最大級の沖積平野であり、その北西部には全国から多くの参拝客を集める出雲大社が鎮座している。八岐大蛇（やまたのおろち）で有名な斐伊川の河口にもあたり、この川で古代より活発に行われていた鉄穴流しによる砂鉄採取・たたら製鉄に伴う排砂によって平野が拡大したという。現在は、稲作を中心とした農業が盛んであり、県道周辺には平たい田んぼがいくつも広がっていて、空が大きくみえる。

洪水対策に起源

そんな風景のところどころで目をひくのは、きっぱりと四角く刈りこまれた背の高い木立ちである。田んぼの中に点在するこのあたりの農家住宅は、母屋を中心に納屋や離れなどを備えた大きなものも多く、その周囲には、屋根よりも高く一定の位置に切りそろえられた黒松が植わっている。これが「築地松（ついじまつ）」である。主に屋敷の西及び北側にあり、吹き抜ける強風から家屋敷を守る防風林としての役割を果たす。

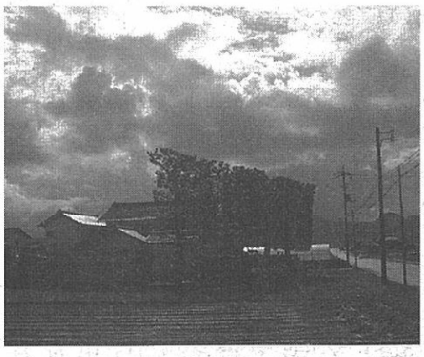
古来、斐伊川は暴れ川として幾度も洪水を引き起こし、その度、堤防は決壊し、家や田畑が浸水した。この地に屋敷を構えるためには、流されないだけの高さが必要であった。そこで地盛りによって土地を高くし、浸水を防ぐための築地（土手）を築き、これを固める樹木や竹を植えた。これが築地松のはじまりと言われる。黒松を主とする現在とは異なり、当初はスダジイ・タブノキ・モチノキなどの雑木が使用され、家を覆うようなこんもりとした屋敷森であった。当時は防風だけでなく、川の氾濫から土地を守り、火災の延焼を防ぎ、おろした枝を燃料に使用し、さらには木の実を食料とするなど多くの役目を担い、その高さや大きさによって家の格式をもあらわしていたとされる。

築地松の見られる斐川町は、出雲市中心市街地の北東方に位置し、11年に出雲市と合併した。町内には情報通信機器関連の誘致企業等が進出し、人口減少が続く島根県においてはめずらしく、人口増加の傾向がみられる地域である。高速道路とのアクセスがよく、周辺各所への車通勤に便利なことからベッドタウンとして一定の需要があり、小規模住宅地の開発が活発に行われている。平らかで利便性のよい出雲平野の田園地帯にも農地を転用した住宅地が目立ち、築地松に囲まれた屋敷が点在する中に現代風の住宅が混じるようになった。

維持管理に助成

出雲の原風景として長く親しまれてきた築地松は、現在、松枯れ被害や生活環境の変化・維持管理の困難さ等によって年々数を減らしている。黒松は4・5年毎に刈り込む必要があり、「陰手刈り（のうてごり）」と呼ばれるこの作業には、少なくない費用がかかる。松の木に登って移動しながら鎌で枝を落とすという危険な重労働にあたる職人も不足している。出雲市では、築地松景観を守るために「築地松景観保全対策推進協議会」を組織し、陰手刈り技術の研修会や保全対策、情報誌発行などを行うほか、築地松景観保全住民協定を結ぶ築地松所有者に、剪定・枯松伐採及び補植などの維持管理に要する経費を助成している。日常だった風景は、守り、伝えるべき伝統になった。

冬の早朝、もやに浮かぶ築地松は幻想的で、神話に満ちた出雲の風土によく似合っている。時間の経過によって自然的・社会的な環境が変化するたび、その時々に新たな風景がつくられる。令和の新しい風景の中で、築地松はどのように続いていくだろう。雄々しく立ち並ぶその姿を、未来の人たちにぜひ見てほしいものである。（松江支所／不動産鑑定士・宇野栄）



㊨大黒松の築地松 ㊦出雲平野（斐川町三分市）の築地松